

聖代の一二六事件

十七人に死刑執行

元士官候補生五名は無期に

参加の士卒千二百五十八名

【東京特信】二二六事件参加の叛乱首謀十七名は最高軍法會議で死刑を宣告され既に執行其他判決が公表されたが帝都は至つて平穏である

安藤輝三 中橋基明 田中優 麦屋清濟 常盤穂清 原康平 鈴木金次郎 丹生誠秀 坂井直 竹島繼夫 高橋太郎 池田俊彦 安田優 中島完爾 香田清真(元大尉) 栗原安秀 道川善助 三上元治

軍人關係民間では磯部浅一 濱川善助 中村義明(左系轉向者)

右は何れも死刑に

麥屋清濟 常盤穂清 原康平 鈴木金次郎 丹生誠秀 坂井直 竹島繼夫 高橋太郎 池田俊彦 安田優 中島完爾 香田清真(元大尉) 栗原安秀 道川善助 三上元治

右は何れも死刑に

元陸軍歩兵少尉山本又は十年の禁錮を判決する

重臣、財閥、政黨、軍閥

特權 階級一掃の昭和維新

自決したる者は只一人

【東京發】二二六事件の最

高軍法會議は秘密裡に進行のを極めて警戒した

陸軍當局は今朝二時を以て叛亂参加の將校及

民衆間参加者十七名を死刑

に五十四名の下士官は、

三年より十五年に亘り各々判決を下されたが下士官の行が猶豫された、陸軍省の

將校廿一名軍醫候補生三名下士官九

十一名民間十名及び兵千三百五十八名叛亂に参加し

軍法會議に於て審議された者は將校十九名下士官七十五名兵十九名民間十名で、その重なる者は曾て任將校が當時

軍法會議に於て審議された者は將校十九名下士官七十五名兵十九名民間十名で、その重なる者は曾て任將校が當時

飛び出した日系女性

機密は雑誌切抜き 戰闘艦コロランドに潜入を自供

何故 自決しなかつた

元士官候補生五名は無期に

参加の士卒千二百五十八名

東京特信

二二六事件参加の叛乱首謀十七名は最高軍法

會議で死刑を宣告され既に執行其他判決が公表されたが帝

都は至つて平穏である

安藤輝三 中橋基明 田中優 麦屋清濟 常盤穂清 原康平 鈴木金次郎 丹生誠秀 坂井直 竹島繼夫 高橋太郎 池田俊彦 安田優 中島完爾 香田清真(元大尉) 栗原安秀 道川善助 三上元治

右は何れも死刑に

元陸軍歩兵少尉山本又は十年の禁錮を判決する

重臣、財閥、政黨、軍閥

特權 階級一掃の昭和維新

自決したる者は只一人

【東京發】二二六事件の最

高軍法會議は秘密裡に進行のを極めて警戒した

陸軍當局は今朝二時を以て叛亂参加の將校及

民衆間参加者十七名を死刑

に五十四名の下士官は、

三年より十五年に亘り各々

判決を下されたが下士官の行が猶豫された、陸軍省の

將校廿一名軍醫候補生三名下士官九

十一名民間十名及び兵千三百五十八名叛亂に参加し

軍法會議に於て審議された者は將校十九名下士官七十五名兵十九名民間十名で、その重なる者は曾て任將校が當時

軍法會議に於て審議された者は將校十九名下士官七十五名兵十九名民間十名で、その重なる者は曾て任將校が當時

飛び出した日系女性

機密は雑誌切抜き 戰闘艦コロランドに潜入を自供

何故 自決しなかつた

元士官候補生五名は無期に

参加の士卒千二百五十八名

東京特信

二二六事件参加の叛乱首謀十七名は最高軍法

會議で死刑を宣告され既に執行其他判決が公表されたが帝

都は至つて平穏である

安藤輝三 中橋基明 田中優 麦屋清濟 常盤穂清 原康平 鈴木金次郎 丹生誠秀 坂井直 竹島繼夫 高橋太郎 池田俊彦 安田優 中島完爾 香田清真(元大尉) 栗原安秀 道川善助 三上元治

右は何れも死刑に

元陸軍歩兵少尉山本又は十年の禁錮を判決する

重臣、財閥、政黨、軍閥

特權 階級一掃の昭和維新

自決したる者は只一人

【東京發】二二六事件の最

高軍法會議は秘密裡に進行のを極めて警戒した

陸軍當局は今朝二時を以て叛亂参加の將校及

民衆間参加者十七名を死刑

に五十四名の下士官は、

三年より十五年に亘り各々

判決を下されたが下士官の行が猶豫された、陸軍省の

將校廿一名軍醫候補生三名下士官九

十一名民間十名及び兵千三百五十八名叛亂に参加し

軍法會議に於て審議された者は將校十九名下士官七十五名兵十九名民間十名で、その重なる者は曾て任將校が當時

軍法會議に於て審議された者は將校十九名下士官七十五名兵十九名民間十名で、その重なる者は曾て任將校が當時

飛び出した日系女性

機密は雑誌切抜き 戰闘艦コロランドに潜入を自供

何故 自決しなかつた

元士官候補生五名は無期に

参加の士卒千二百五十八名

東京特信

二二六事件参加の叛乱首謀十七名は最高軍法

會議で死刑を宣告され既に執行其他判決が公表されたが帝

都は至つて平穏である

安藤輝三 中橋基明 田中優 麦屋清濟 常盤穂清 原康平 鈴木金次郎 丹生誠秀 坂井直 竹島繼夫 高橋太郎 池田俊彦 安田優 中島完爾 香田清真(元大尉) 栗原安秀 道川善助 三上元治

右は何れも死刑に

元陸軍歩兵少尉山本又は十年の禁錮を判決する

重臣、財閥、政黨、軍閥

特權 階級一掃の昭和維新

自決したる者は只一人

【東京發】二二六事件の最

高軍法會議は秘密裡に進行のを極めて警戒した

陸軍當局は今朝二時を以て叛亂参加の將校及

民衆間参加者十七名を死刑

に五十四名の下士官は、

三年より十五年に亘り各々

判決を下されたが下士官の行が猶豫された、陸軍省の

將校廿一名軍醫候補生三名下士官九

十一名民間十名及び兵千三百五十八名叛亂に参加し

軍法會議に於て審議された者は將校十九名下士官七十五名兵十九名民間十名で、その重なる者は曾て任將校が當時

軍法會議に於て審議された者は將校十九名下士官七十五名兵十九名民間十名で、その重なる者は曾て任將校が當時

飛び出した日系女性

機密は雑誌切抜き 戰闘艦コロランドに潜入を自供

何故 自決しなかつた

元士官候補生五名は無期に

参加の士卒千二百五十八名

東京特信

二二六事件参加の叛乱首謀十七名は最高軍法

會議で死刑を宣告され既に執行其他判決が公表されたが帝

都は至つて平穏である

安藤輝三 中橋基明 田中優 麦屋清濟 常盤穂清 原康平 鈴木金次郎 丹生誠秀 坂井直 竹島繼夫 高橋太郎 池田俊彦 安田優 中島完爾 香田清真(元大尉) 栗原安秀 道川善助 三上元治

右は何れも死刑に

元陸軍歩兵少尉山本又は十年の禁錮を判決する

重臣、財閥、政黨、軍閥

特權 階級一掃の昭和維新

自決したる者は只一人

【東京發】二二六事件の最

高軍法會議は秘密裡に進行のを極めて警戒した

陸軍當局は今朝二時を以て叛亂参加の將校及

民衆間参加者十七名を死刑

に五十四名の下士官は、

三年より十五年に亘り各々

判決を下されたが下士官の行が猶豫された、陸軍省の

將校廿一名軍醫候補生三名下士官九

十一名民間十名及び兵千三百五十八名叛亂に参加し

軍法會議に於て審議された者は將校十九名下士官七十五名兵十九名民間十名で、その重なる者は曾て任將校が當時

軍法會議に於て審議された者は將校十九名下士官七十五名兵十九名民間十名で、その重なる者は曾て任將校が當時

飛び出した日系女性

機密は雑誌切抜き 戰闘艦コロランドに潜入を自供

何故 自決しなかつた

元士官候補生五名は無期に

参加の士卒千二百五十八名

東京特信

二二六事件参加の叛乱首謀十七名は最高軍法

會議で死刑を宣告され既に執行其他判決が公表されたが帝

都は至つて平穏である

安藤輝三 中橋基明 田中優 麦屋清濟 常盤穂清 原康平 鈴木金次郎 丹生誠秀 坂井直 竹島繼夫 高橋太郎 池田俊彦 安田優 中島完爾 香田清真(元大尉) 栗原安秀 道川善助 三上元治

右は何れも死刑に

元陸軍歩兵少尉山本又は十年の禁錮を判決する

重臣、財閥、政黨、軍閥

特權 階級一掃の昭和維新

自決したる者は只一人

【東京發】二二六事件の最

</

功を盡すばかりである。すなはち天下を動かすれば、正名として天下を動かすに足りうる」と切々として兩人を説いたので、久坂も樺山も、に彼の説に従ひ、盟約書を遂作り、血判して固く誓ふたその文に、
堂々タル神州 戎狄ノ辱シメタウケ 古ヨリ傳
ハレシマ大和魂今ハ既ニ 絶エナント帝ハ深ク歎キ 玉フ 然レドモ久シクガマレル御世ノ 因循委惰トイフ俗ニ習ヒテ 獨リモ此ノ心ヲ振ヒテ 皇學ノノ福ヲ擴ヒ人ナシ畏ム江戸での密約を重役に打明
出として土佐に入るや牛平太の絶叫は口から口へ胸から胸へ、南海の別天地を躍らせる處に、青年の血を到る處志士同志は、響きの聲に應するやうに坂本龍馬中岡慎太郎平井善之丞平井寅次郎間哲馬吉村寅次郎那須信吾を初めとし、て百九十二名、いそばくなくして殺せ投じた愈々

『頸』顎先生とあだ名され
た長い頭を振りたて、武市
半平太は、長州の久坂立瑞
薩州の樺山三園を前に口角
泡を飛ばしてゐた
文久元年秋である
皇極寺宮櫻御降の事勅
許さるとの報がえ戸に
飛ぶと諸國の志士の憤慨は
その極に達した
一將軍の 皇妹を乞ひ奉る
はせん上至極 至尊を冒瀆
非ず 勅許されしは朝廷の御志に
結果である 実直し皇妹の
御與を 東海道陸離垂壁に逃
し奉るの甚しいものである
至尊を冒瀆するべし」と
幕府の暴状を攻撃して止
まず 隠謀は著々歩を進め
久坂樺山も加盟 武市半平
太を説きに來たのである
半平太は、その輕撃を戒
しめて「幕府の心事は憎む
べきであるが 既に朝てい
が許し給ふのだ 今暴舉
を敢てすれば却つて禍を招
くのみ 寧ろわれわれが歸
國 衆議を一定し 國主を
奉じて三國一時に關下に入
り 正々堂々尊王攘夷の實
を取るが爲めに、

言ひ争ひ玉ヒヒドモ 却而
ソノ爲メニ罪ヲ得給ヒス
シヤ皇國ノ今ニモ給タ左
ニセシナ デヤサ見玉レ
キ 彼大和魂ヲ奮ヒ起
タビ揚ラバ 團結シテ水
火を踏ムトア 爰ニ神明ニ
相謀リテ國家復興ノ万
ニ神浦セントス 錦旗一
シ 异性兄弟ノ結ヒナラ 侍
ヒト上ハ帝ノ大御心ヲ
ニヌ奉リ 我カ老父ノ御
志ヲ繼キ下ハ万民ノ憂ヲ
モ拂ハントス 左レバ此
中ニニモ 何ニカクニ
争フモノアラバ 神ノ怒
リ罪シ玉フマタデ 人
々争シツヒテ脇カギチラ
セントオノカギチラ
ヲ書キシルシラサメ置ス
文久元年酉辛亥八月
薩長十三三ハシ聯合運動の
橋矢である

文久元年九月四日 半平
太は檄文もあるこの盟約
ヲ書キシルシラサメ置ス
文久元年酉辛亥八月
薩長十三三ハシ聯合運動の
橋矢である

秋思深し

四季の遷り變り暎かならざるこゝ南の國にも朝夕の冷氣漸く肌に沁みて、何んとなく秋潮已に深しの感がある。

殊にわれらの如く遠く家郷をはなれ、はなてなき旅路をさすらふものに取りて、一年の内一肩懐しきは矢張り落寞の情慙きぬこの晩秋の氣に如くはない。

幕末の志士を

幕末の志士を語る

ゆくべき
もしまして
裏しかも
安燃煙の歲月を空しく重ね
たらんものにおいておや。
△
いま風塵の都門を出でた
る者の秋思は斯の如しと雖
も吾等は之を以て無爲の詩
と爲すものではない、即ち
哀愁を内に見詰め然も能く
黙り克く隱忍して初めて眞
して、何
しと云ふ
である。晚秋の野を行く秋思は限り
なく深し。
幾星霜過ぎ去りにけむ
あらぬちに
想は深し秋の寂びさま
〔バク族の旅にて無文漢〕
して、痛憤するこれを聞
いて、半平太は「今日の時
勢は匹夫の勇を振ふるでは
ない。東洋は一國の職職に
ある者、之を殺せば所
謂暴を以て暴に代ふるの責
を免れない。わが同盟は忠
貞光公上
生活の道
省思索の
人と雖も
落葉たる
のごとく
をなげう
胸火を搔
却つて不

狗會を發起し同好者と共に當園検校に師事して一生懸命に練習し居たものであるが、此項では検校そのもののけで彼は自信だと云ふ自惚れと自信が出来たのである。本日一日の夜八時を期し市内日本俱樂部で東西の同好者や聴き手を集め花々しく満員にて無慮百五十名の観客や聴客で、語り物は座頭兼ガキ大將の中山白頭の鏡山を筆頭に寺小星前後少しや二年等で何れも僅々一年や二年の稽古とは思へぬほどの上達振りに満堂の聽衆をヤンヤとうならせたが以下記者の短評を試みれば本邦 聲量は充分ある様だが吐からの方力が足らぬ情と義を語る日本古來

あるのがわかつた警察に召喚され取調べにモレーラ外三げんの店より万引し。それまでの犯行を自白した全婦人はバーレー・横浜地在住香川縣人入砂ソメ(假名)と稱夫子もある三十七歳の年増女である。彼女は美しくはないが氣象の非常にはつきりした女で内間するに二年前まで某小學校にて教職に携つてゐたと。それで最近の生原因として活苦に於ける貧困のためと詰つてゐる。昨年来金地方には頗々と邦人のみ製ふ盗難があつた。渾水の盡力で盜賊の一團は捕縛され安堵の胸をおはすたが、はからずも今回この女性の外人商店に於ける万引事件は日本人の顔丸つぶれたと在住人は憤慨してゐる。